
絶叫プロポーズ

カトラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶叫プロポーズ

【Nコード】

N9518B

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

結婚を考えていた俺は、遊園地のジェットコースタでプロポーズしようとしていた。果たして成功するのか？恋愛コメディ風になつてると思います。

(前書き)

先日、家族で遊園地に行つてるときに、アイデアがうかびました。
最後まで読んでいただけたら幸いです。

週末の午後五時を少しまわったところに三時間並んでやっと乗れた、人気ジェットコースターの車中で、俺は香織に、プロポーズしようとしている。

俺の名前は上田陽一。歳は二十七 有名自動車メーカーで営業をしている。

俺と香織は付き合って早三年になる。

職場の新人社員で入ってきた香織に一目ぼれしてしまい、現在に至る。

そして、昨年くらいから、強烈に香織と結婚したいと思った俺は何度も、

プロポーズをしようとしたが、全て未遂に終わっていた。

そう、俺は意気地なしなのだ。

そして、意気地なしの俺が少ない頭をフル回転させて、選んだプロポーズの場所が遊園地のジェットコースター。

俺の頭はおよそプロポーズするには、最悪なシチュエーションを選択していた。

この最悪のシチュエーションを演出してくれるジェットコースターのスペックは全長およそ4200メートルで高さ97メートルまで一気に上ると、そこから一気に急降下する、その時のスピードが時速165キロになり、その時にかかる耐圧は4Gになるらしい。最高速度、全長、最大落差と3つのギネス記録をもってる化け物コースターだ。

しかし、俺はもう、あとにひくつもりはない。あたってくださいろだ。

たとえば、玉砕してもこの化け物コースターで果てるのなら本望ではないか……

そう、自分にいいきかせてプロポーズに挑んだ。

ジェットコースターがホームに入ってきた。

俺と香織が乗る位置は前から数えて七番目、後ろから数えた方が早い位置だ。

乗車する前に、香織の荷物をホームの外に設けられた棚においた。さすが、人気コースターだけあって、

乗る前からラテン系の外国人が前の方の座席で騒いでいる。

係員が二点締め安全シートベルトの確認をしに各座席を点検している。

係員の点検OKのサインが出て、けたたましい発車を告げる音と共に、コースターが発射した。なめらかに登り口まで向かってすべり出したコースター。コースターを頂上まで引き上げるチェーンの音がした。

ガチャン カタ カタカタ カタカタカタ。

いよいよ勝負の時がきた。

「香織、上みてみるよ、むちゃくちゃ上っていくんだなあ」

「うわぁー凄いね 全然頂上みえないよー」

「高さ97メートルまでいくからなあー」

「うん めっちゃ怖いよ」

香織の表情は、緊張と恐怖にひきつっているだろうと思われる俺の顔とは、対照的に凄く楽しそうだ。

カタカタカタ カタカタカタ カタカタカタ

コースターは、かなり上ってきたみたいで、下にいる人がピンポン球のようにみえる。

「ねぇーでもなんで？ 陽ちゃんジェットコースター嫌いなのに乗ろうなんていつてきたの？」

香織は不思議そうに俺の顔を見つめて言った。

「いやぁーたまには、こうゆうのいいかなあって思ってたさぁー」

それに香織コースター好きだろう」

「うん。私こんなの大好き。でもへんなのお
今日の陽ちゃん、なんだかぁ、おかしいよ
並んでるときから、あんまり喋らないんだもん。
なにかぁ、企んでるでしょう」

凶星だった。女はこわいなぁと俺は思った。

カタカタカタ カタカタカタ カタカタカタ

コースターは頂上付近まで上ってきていた。

隣に見える巨大観覧車が平行な高さになっている。

下を見ると、

遊園地全体が見渡せて駐車場にとめてある車までもが、ピンポン球のように見えた。

「ねぇ、見て見て先頭まもなく頂上につくよ」

見ると、先頭車両は頂上を意味するポールにさしかかっていた。

香織も少し怖いのか、さっきからつないでいる手をギュッと強くにぎりだした。

俺はもう時間がないと思い、いよいよプロポーズの言葉をきりだした。

「あのお 香織 こんな時になんなんだけど……」

「なによ あらたまちゃって」

「うん。俺達付き合いだして、もう長いよなぁ……」

「うん。長いよねえ それで何？」

「それで……」

「何よ」

「そろそろ……」

「……………」

「早くいつてよ。きになるじゃない」

ガチャン その時先頭車両が急降下しだした。
前方の外国人がバンザイしているのが見える。

そして、俺達の乗ってる車両も急降下しだした。
ゴーーーーゴーーーー風を切る物凄い音。

「キヤー キヤー うわぁ」
色んな悲鳴が交錯している。

急激に落下する中、俺は香織にプロポーズした。

「俺と一緒にしてくれ」 結婚してくれ」

「エー 聞こえないよ もう一回言って」

「だから、俺と結婚してくれ」

ゴーーーーゴーーーー

俺はついに言ってしまった。

恐らくこのようなシチュエーションでプロポーズした奴はいないだろう。

それに、香織にはこの轟音の中では聞き取れていないだろう。

俺は自分の不甲斐なさや怖さのために、涙と鼻水がでてきた。

そうして、ジェットコースターは二回の急降下をした後に

左右の高速ループをしてフィニッシュのトンネルをこえて停止した。

時間にしておよそ三分弱の俺のプロポーズも終わった。

ホームに向かってゆっくり進むコースター。その中で香織は言った。

「いいよ」

「えー香織今なんていったの？」

「だからあーさっきの返事は結婚してあげる」

香織の目からは、涙が流れていた。

「陽ちゃんって、ほんとバカね。」

さっきコースターがおちる、あんなタイミングで

こんな大事な事言うんだもの」

「聞こえたのか？」

「ちゃんと聞こえたよ。だって陽ちゃん

大声で絶叫してプロポーズしたのよ」

「そうだなあ 香織の言うとおりホント俺ってバカだな」

香織は嬉しそうに笑っていた。

そうして、急に真面目な顔になって俺に言った。

「陽ちゃん鼻水いっぱいでてるよ」

二人で大笑いした。

「香織だって涙で化粧ボロボロだぞ」

それから三ヶ月後に俺達は結婚した。

今では、子供が二人いる。

そして、今家族であのプロポーズをしたジェットコースタの前にたっている。

子供達にむかって香織が嬉しそうに、俺のプロポーズ武勇伝を話している。

「パパってほんとバカね」と娘がいった。

「おいおい。バカってなんだよ」

あれがなかったら、お前達も生まれてないんだよ」

そうして家族で大笑いした。

(後書き)

お読みいただきありがとうございました。

感想とかがありましたら、今後のためお願いします。

ペコ m (| ; m (三 m ; | (m ペコ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9518b/>

絶叫プロポーズ

2010年10月8日15時10分発行